

# 町民文芸



## 只見短歌会

十二月詠草

大塚栄一 指導

病みてより二十年もの歳月を数多の人に支へられ来つ  
吉津 政枝

音もなく雪積む夜半に息絶えし白寿の母の両手まさぐる  
古川 英子

針を持つ楽しみ未だ残る身は孫より預かる半纏を縫ふ  
皆川 恒子

異状気象に悩まされ来し一年ぞ農の納めと鍬を洗ひぬ  
渡部 ゆき子

軒下につるせし薬草乾きつつ吹く風冬の如く寒しも  
馬場 八智

施設より久びさに来て妹や姪らと正月楽しく過ごす  
五十嵐 英子

危篤ぞと言はれし姉に付き添へて姪らと共に除夜の鐘聞く  
齊藤 ちひろ

急須より落ちる滴を見つめつつ夫と在りし日をしみじみ思ふ  
目黒 富子

冬囲ひに小暗くなりし玄関に活けし黄菊は灯点る如し  
渡部 ヨリ子

鮮やかに店内狭しとシクラメン咲きをり外の吹雪を忘る  
新国 洋子

年末の支払ひ多く通帳の残高見つつ大き息つく  
新国 洋子

(出詠順)

## 只見俳句会

一月例会

目黒十一 指導

行進曲口づさみつつ年の暮  
洋子

鳶の声ひよろろ北風来る兆し  
敦子

晴天や土手の並びし鴨の群  
赤き実の枝を移りて冬の鳥  
礼

漬物に酸味の走る今年かな  
よくのびる焦目の匂ふ雑煮かな  
一灯

峰は雪椅子滑らせて医者動く  
閉ざしても松飾りある考古館  
恒夫

父の倍生きて晩学初句会  
雪おろし地蔵と宮に割りふられ  
吉児

鰐口に下帯一本七日堂  
鍋の香の水面這いけり炬燵舟  
邦男

冬ごもり谷間家並みの様変わり  
退庁に間のある時間暮れ早し

手垢なきあしたに夢を大晦日  
枯れ葦に囁く風や川光る  
隆堂

特売のパプリカ派手に冬の暮  
軒桁の高きに光る凍豆腐  
笑羊

冬田中ゆつくり過ぎる野良猫プー  
黒谷川ここが一番枯葉鳴る  
リウコ

肌寒や糞ふり込む二斗の樽  
低くある会津の空や十二月  
一穂

一転し吹雪の後に青い空  
赤鳥居雪に埋もれて村外れ  
修一

裸木と共に日射しを分かち合い  
雪搔きに声かけて行く配達夫  
康女